

つながる力？―つながりのプラスとマイナス―

石田 淳

「つながり」の再発見

最近、「絆」や「縁」、「つながり」といった、人と人との結びつきを、どちらかといえば肯定的に指し示す言葉をよく耳にするようになった。

典型的には、二〇一一年三月一日に発生した、東日本大震災とそれに伴う原発事故の後、「絆」という言葉が被災地支援、そして復興支援の文脈で頻繁に使われた。そして、二〇一一年末には、日本漢字能力検定協会が毎年発表している「今年の漢字」に「絆」が選ばれている。東日本一帯を襲った地震・津波災害と大規模原発事故という未曾有の事態に、人と人とのつながりの重要性が改めて強く認識されたといえる。

また、その少し前にはNHKが、ニュースやドキュメントにおいて「無縁社会」を取り上げ問題化した。現代

社会において、地縁や血縁といった「縁」が希薄化して、孤立した個人が社会を漂流する様を描き出し、大きな反響を呼んだ。少子高齢化に直面する日本社会にとって、「縁」の復権は重要な問題提起となったといえる。

さらに、サブカルチャーに目を転じると、J・POPでは、恋や愛とともに、絆やつながり、仲間、家族といった関係の大切さをポジティブに歌い上げるものが氾濫している。そうした歌を歌う若い歌い手たちは、いずれも純真でキラキラとした目をしていて、優等生的である。若者はいつの時代も上の世代から、「最近の若い者は・・・」とダメ出しをされるのが常であるが、こうした彼らの「絆」重視は、上の世代からのウケもいいたろう。

こうした時流を読んでか読まずか、本学・大阪経済大学では大学の基本コンセプトとして「つながる力。」を

標榜している。大学HPによると「人と人が出会い、つながる力をたいせつにします。学生同士、学生と教職員、教職員同士、現役学生と卒業生、大学と社会などの『つながる力』ナンバーワンをめざします」とある^①。「モーション姑娘」のような最後の句点の意味が不明なところもあるが、「絆」の重要性が再発見される時代にあつて、時代のニーズをつかんだ、その意味でキャッチイナフレーズであるといえる。

ネットワーク論に対する注目

「つながり」の重要性は、社会科学を含む学問分野でも再認識されている。ここでは、「ネットワーク」というもう少し抽象的な言葉が使われている。つながりの学問であるネットワーク論は、社会科学の側面である社会的ネットワーク論をその中核の一つとして、いまや情報科学・物理学・生物学・疫学などにまたがる学際的な学問分野として成長しており、最先端科学の一つと目されている。

そのネットワーク論、とりわけ社会的ネットワーク論

の源流の一つとなった研究が、一九六〇年代にアメリカの社会心理学者スタンレー・ミルグラムによつてなされた手紙実験である。ミルグラムの問題関心は、アメリカ社会における個人間のネットワークの「距離」を実際に測定することであつた。抽象的なネットワーク論では、個人は点、個人間のつながりは点と点を結ぶ線として捉えられる。では、アメリカにいる任意の二人の個人を結ぶ線は何本くらいだろうか。

ミルグラムはこの問いに答えるために、ユニークな実験手法を開発した。ある都市の住民からランダムに被験者を選び出し、その被験者から別の遠くの都市に住むある特定の個人に向かつて、それぞれの被験者の「つて」をたどつて手紙を転送して欲しいと頼んだのである。手紙の送り先になつたのは、ごくごく普通の一般人であつて、当然のことながら被験者はその人のことを知らない。教えられたのは名前と住んでいる場所である。そこで、被験者たちは送り先の個人を知つていそうな知り合いに、この手紙を次々と転送していった。

実際に対象者に届いたのは、全体の四分の一ほどであつたが、これらの手紙は平均で五人の仲介者を経て対

象者に届けられたのである。つまり、ネットワーク上の距離で言えば、平均六本ということになる。ここから、社会のネットワーク構造において、任意の二人はだいたい六本くらいでつながっているということが推察される。この発見は今日では「六次の隔たり」という名前で知られている。

「六次の隔たり」は、予想に反して少ない距離で見知らぬ他人同士がつながっていることを示している。「世間は意外に狭い！（イツツ・ア・スモールワールド！）」というわけである。のちに、このネットワークの一般的構造を数学出身のダンカン・ワッツたちが解明し、「スモールワールド・ネットワーク」と名付け、このネットワーク構造が社会関係だけではなく、電力ネットワークや蛍の発光同期ネットワークなど、さまざまなネットワークに特徴的なものであることを見いだした。さらに、ネットワーク論の分野では、インターネットのリンクネットワークなどにより特徴的な「スケールフリー・ネットワーク」の発見等が続き、研究が日々進展している^②。

つながりの力

六次の隔たりを実現する「スモールワールド・ネットワーク」の特徴は、ネットワークの中に特につなごりの強いまとまり（これをネットワーク論では「クラスター」という）がいくつか存在し、それらのクラスターの間が少数の線で結ばれているような構造を持つていることである。クラスターは、現実の社会的ネットワークで言えば、家族や友人、同僚といった生活を共にしたり日常的に接する人たちである。こうした人たちの間のつながりは強い。たとえば、私に二人の友人、友人Aと友人Bがいた場合、友人Aと友人B同士もまた友達である可能性が高い。このようにクラスター内では全員がそれぞれ知り合いという密度の濃い絆が築かれている。一方、クラスター間をつなぐ少数の絆は、現実で言えば、たまに会う「知り合い」「知人」である。あるいは、仕事関係で言えば「同業他社の知り合い」とか「異業種の知り合い」といった人たちである。こうした人とは自分の周りに自分以外の知り合いはほとんどいないかもしれず、それゆえ結びつきとしては「弱い」といえる。

しかし、その「弱いつながり」がある種の「強さ」をもっていることを、一九七〇年代にアメリカの社会学者マーク・グラノベッターが見いだした。グラノベッターは、転職を経験した人びとに聞き取り調査を実施し、転職の決め手となる情報をもたらしたのが、普段よく会うような「強いつながり」ではなく「弱いつながり」である場合の方が圧倒的に多いことを見いだした。また、社会的な統合の点でもクラスター間を取り持つ「弱いつながり」の役割を指摘して大きな反響を得た^⑧。

グラノベッターの研究は、つながりのもつ社会的な「力」の一つの重要なタイプを見いだしたものと捉えることができる。このような「力」は、少し難しい言葉で言えば「ネットワークに内在する資源」である。「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」として、近年社会科学において学術的にも注目されている。こう聞くとすぐく難しくそんなことを言っているようであるが、よくすぐにベタな言葉で言えば「コネ」みたいなものである。

つながりのもつ「力」は、「弱いつながり」だけではなく、当然のことながら家族や友人関係といった「強いつながり」にもある。こちらは、情緒的なつながりにおいて、

人間の存在に欠かせない愛情や承認をもたらす。実際に、人びとの幸福感はお金やモノよりも、つながりの有無に大きく左右されることが知られている。

ニック・ポータヴィーは、「幸福の計算式」という興味深い枠組みを使つて、統計的データの分析から「つながり」が幸福に与える影響を、お金が幸福に与える影響と比較して算出している。これは、個人の性格特性の偏りを考慮した上で、ある「つながり」をもつことによつて得られる幸福（個人が調査において自己申告する幸福感）の増分を得るために、収入のいくらの増分が必要かを算出したものである。この計算式を使うと、「お金で買える幸福」一単位によつて、さまざまなタイプの幸福因子の効果を測ることができる。

ポータヴィーによると、イギリスの調査結果の分析から、独身の人を結婚している人と比べたとき、その埋め合わせをするためには、約二〇万ポンド（約二五〇〇万円）の収入増が必要であり、また誰ともつきあいのない人の幸福を埋め合わせるためには、一三万ポンド（約二八〇〇万円）必要になるという。お金と比べたとき、身近な「つながり」は心理的にも大きな「力」をもつて

いる^④。

つながりの苦しみ

このように、「つながり」は大変重要であり、「つながりの力」はよいことづくめである。「みなさん、つながる力を大切に！」確かにその通りであるが、それだけでいいのだろうか。どのようなものにも、メリットの影にはデメリットが、作用の脇には副作用が存在する。「つながり」もまたそうである。ここでは、二点ほど、つながりのマイナス面を指摘しておこう。

一つは心理的な側面である。「つながり」は心理的な幸福や安定をもたらす一方、心理的な苦しみや焦燥ももたらす。そのメカニズムは、「つながり」の中の「比較」である。他者とみずからの境遇（生まれ、育ち、現在の裕福さや才能、人望）を比較する中で、みずからに足らざるものを他者に発見したとき、私たちは強く心を苦しめられる。あるいは、みずからが心の底から欲するもたざるもの（特に恋愛関係）を他人がもっているのを見ると、激しい焦燥と怒りに身を焦がされる。いわゆる「嫉妬」

「ねたみ・そねみ」である。こうした「つながり」に内在する他者比較による心理メカニズムは、社会学・社会心理学で「相対的剥奪」という名前で知られている。

「つながり」の中にあるということは、否応なくこのような比較に巻き込まれることである。特に、近年ではネット環境の整備によつて、ソーシャルネットワークサービスなどのコミュニケーションツールが発展したこともあつて、多くの人と気軽にヴァーチャルにつながる事ができる時代になつている。たとえば、ツイッターやフェイスブックでは、普段あまり会うことのない旧友や、関係の薄い知り合い、あるいは知り合いの知り合いや、時には有名人を含む実際にはあつたことのない人たちとつながることができる。このことは「つながりの力」の恩恵にあずかる機会を増やすと同時に、「つながりの苦しみ」に苛まれる機会をも増やす。たとえば、フェイスブックを利用すると知り合いの知り合いから、思いがけず値打ちのある転職情報もたらされることもあるが、同時に友人たちが嬉々として開陳する「リア充」生活ぶりともみずからの貧しい暮らしと比較して、ねたましさに苛まれるかもしれない。

「つながりの力」が手軽に利用できる時代は、みながつながりの苦しみ」にセンチティブになる時代なのかもしれない。

つながりの暴力

次に、より根源的な「つながりの力」の負の側面についてである。

先に指摘したように、「つながり」には大きな「力」がある。しかし、その「力」は容易に「暴力」に転じる危険性をもつ。ここで、「暴力」とは、ある個人の意思に反して何かをさせる（あるいはさせない）力を意味する。「つながり」には、つねに相手を支配し、何かを強制しようとする契機が潜んでいる。

おおよそ人類に共通して、「つながり」を成り立たせる根源には「交換」があり、その交換を始動させるものは「贈与」である。つまり、誰かに「贈り物」（なんでもよい、言葉でもお金でも人でも物でも）を送ることが「つながり」の始まりにはある。しかし、この「贈与」そのものに、先鋭的な暴力性が潜むことを、フランスの

社会学者マルセル・モースは喝破している^⑤。モースは、アメリカの先住民の「贈与」の形式である「ポトラッチ」にその典型をみる。アメリカの先住民たちの間では、部族間で互いを招き宴会でもてなし、贈り物を贈り合うという儀礼がある。しかし、接待合戦の果てに、自分たちの部族の財産すべてを使い切るような「行き過ぎた贈与」がしばしば行われていたという。極端な場合、送り先の目の前で贈り物の財を積み上げ、それに火を付け燃やしてしまうこともあったという。ここで「贈与」は「送られたらお返ししなければならない」という規範を利用した、相手を支配する「武器」になっていたのである。

つながる相手に対する直接的な暴力以外にも、ひとたび「つながり」が作られ、それが既成事実化すると、その「つながり」自体がメンバーに対して一種の強制力を持ち始めるということもしばしば観察される。「家族」「仲間」「チーム」「職場」「国家」・・・どのようなレベルのつながりであつても、そこには一種の規範が打ち立てられ、それぞれの役割を強制される。それが、結果的に全体のパフォーマンスを向上させたり、一人一人の幸福につながったとしても、形式的にはそれが強制を伴うもの

であることには変わらない。

とくに、この「つながり」がもつ自発的な強制力、あるいは権力性が、何らかの意図によって操作される可能性には敏感であるべきだろう。戦時下の国民統制に、「隣組」や「組合」といった人びとの「つながり」が用いられていたことは記憶されてよい。

また近年では、何かを覆い隠すように「つながり」が強調されているようなことがある。たとえば、経営戦略・労務管理・人事マネジメントの一環として、「つながり」が強調されるようなケースがある。居酒屋などの飲食業やケア・ワーカーなどの仕事は、低賃金で労働条件が厳しく、離職率が高い業種である。そのような業種において、厳しい労働条件の代償として「やりがい」が強調される。その「やりがい」の一つとして、職場の仲間やお客さんとの「つながり」が賞賛され、笑顔・感謝といったポジティブな情緒が注入される。もちろん、仕事の上で「やりがい」をもつことは何も悪いことではないものの、それが不当な労働条件で過剰労働を自発的に行わせる「やりがい搾取」につながる危険性は、頭の片隅に入れておいたほうがよいかもしれない^⑥。

宿命としてのつながり

とはいえ、私たちは遥か以前から、それこそヒト以前から、ずつとつながって生きてきた。その意味で、人間は高度に社会的な動物である。だから、ここで紹介したようなことも、じつはすべてすでに知っていることであって、たかだかここ数十年しか歴史のないネットワーク論などの学問が、それを「再発見」しているにすぎないともいえる。結局は、「つながり」は私たちの宿命なのである。

ただ、多くの人たちが（とくに悪賢そうな大人が）「つながり」のよい側面ばかりを強調しているのであれば、少し斜に構えて「つながり」を見返してみるのもよいだろう。

注

- ① <http://www.osaka-u.ac.jp/life/>
- ② ネットワーク研究の中心人物であるワッツやバラバシ

が書いた一般向け解説書として次のものがある。ダンカン・ワッツ、二〇〇四、『スモールワールド・ネットワーク』阪急コミュニケーションズ。アルバート・ラズロ・バラバシ、二〇〇二、『新ネットワーク思考』NHK出版。また、ネットワーク研究の全般的解説としては、以下のような本もある。マーク・ブキャナン、二〇〇五、『複雑な世界、単純な法則』草思社。安田雪、二〇一〇、『つながり』を突き止める』光文社新書。

③ミルグラムの実験研究とグラノヴェッターの「弱いつながりの強さ」のオリジナルの研究論文は、以下のリーディングスで読める。野沢慎司（編・監訳）、二〇〇六、『リーディングス ネットワーク論』勁草書房。

④ニック・ポータヴィー、二〇一二、『幸福の計算式』阪急コミュニケーションズ。しかし、この結果は、収入と幸福の内因性（収入の増加が幸福の増加をもたらすだけではなく、幸福の増加が収入の増加に結びつくという逆方向の因果関係もあり得るということ）を考慮していない。内因性を取り除いた純粋な収入の効果による幸福の計算式では、「つながり」の値段はかな

り安くなる。

⑤マルセル・モース、二〇〇九、『贈与論』ちくま学芸文庫。
⑥「やりがい搾取」の問題を、最初期に指摘したのはバイク便ライダーのフィールドワークの成果である以下の文献である。阿部真大、二〇〇六、『搾取される若者たち』集英社新書。また、以下の文献も参照のこと。本田由紀、二〇一一、『軋む社会』河出文庫。

（人間科学部准教授）

